

(1) 寮 祭 思 惟

「流るる雲に行く水に ぐれない深き木群にも
噫、暮れ易き若き日の 宴の夢を偲ばずや 遊子わびしき影長し」(一番)

弘南寮の寮歌である、寮歌と云えばコンパでありそして寮祭であった。

我々が弘明寺界限で過ごした四年間、およそ半数が下宿住まいと寮生であったろうか、国立大の恩恵を多分に享けたのは、環境劣悪ではあってもやはり寮生で、下宿代の半分位の寮費で月々賄えた。(それでも滞納者が多く、問題化していたが) 常に渴つえている感じは免れないが、好奇心と時間はタップリあったので決して惨めではなかった。

弘南寮(四寮)は金沢文庫に在り、四十名程の寮生が各科各学年に渡って居り、またなに故か、大先輩もいて不思議な混沌(カウ)を形成していた。

人数が不確定なのは、時折食客が滞在するからである。他の寮に比べて遠隔地にある為開放的と云うか、若干ルーズな面もあったのだ。

寮生はよく眠りよく遊んだ、当時は電力事情も悪く深夜突然の停電も度々であった。それでも麻雀をやるのである、雀卓の真ん中にローソクを立て、四人それぞれに白い紙をくわえるのだ、なけなしのバイトの稼ぎを賭けて、正に鬼気迫るものがあった。

新入生はコンパのたびに酒を覚え、やがて腕をあげていった。珍芸披露の極め付きは、叩き売りの口上か、或いは小道具を並べての数え唄も忘れがたい。年に一度の寮祭には、前日からポスターを町内に張り出し、駅前商店街をバケツなど叩きながら宣伝に廻った。当日は先輩達からの差し入れもあり、地域の人達も巻き込んで羽目を外したが、大概の事は大目に見てもらえた、そしてこの日は誰でも寮内に立ち入ることができたのだ。舞台がはねてファイヤーストームの興奮さめやらず、真夜中に半裸のまま称名寺の境内に、なだれ込んで氣勢を上げ、寮歌をどなり梵鐘を撞き鳴らした。当然大目玉を食らった。

「鐘楼深く緑して 栄枯の夢やいましてし
源家ゆかりの鐘の音も あした夕べの論しにて 銀燭ゆらく我が住みか」(二番)

事件が起きたのはその数日後であった。夕方下校してきた何某が、いつものように隣の彼某の部屋に入り込んでだべりながら夕食を待っていたのだが、フト部屋の隅を見ると、自分のズボンがブラ下がっているではないか。---俺のズボンがなんでここにある? --二人は不気味なものを感じて絶句した。各室の入口は板戸であり外出時には中廊下から、南京錠が掛けられる。ポツポツ戻って来た寮生達が、それぞれ各部屋に異変を感じて騒ぎだすまで何刻もかからなかった。私の部屋も一見何事もなかった様であったが、引き出しの中の封書が全て二つに裂かれていた。夕食後緊急総会が開かれ、次の事柄が判明した。

- 今日寮に泥棒が入ったことは確かである、主に現金が狙われたが幸い被害はなかった。
(と云うより、金が無かったのだ)
- 寮生が一人、体の具合が悪く部屋で寝ていたが、全く気がつかなかった。
- 錠前を掛け忘れて登校した部屋には、物色した跡が無かった。

外部から這入った形跡が明らかであるので、直ちに警察に通報した、次の日鑑識係が来て丁寧に指紋の採集などをしていった。しばらくは皆、身の回りに注意を払う様になった。数ヵ月後連絡があり、犯人があげられたと云う、何でも寮専門のプロとのことであった。

(2)

暮れが近づくと帰省する者、バイトや研究室に居残る者、さまざまである。故郷は、札幌から那覇まで、全国に渡っていた。鹿児島出身の二人組は、遂に一枚の切符で二人が帰省する方法を発見した。

正月には各自地酒を持ち寄って“利き酒会”と洒落たが、みんな飲み込んでしまうので、盛大な酒盛りとなってしまった。

三月のある日、痛恨の事件が起こった、大金が紛失したのである。最上級生は就職先が決まり、追い出しコンパも終わって、寮生の半分程が居残っていた頃である。卒業と就職準備等で、背広代など親元から送金があったばかりの一人が、昨夜、就寝中にゴツソリ盗まれたと訴えたのだ。その夜居残っていた全員が一室に集められた、不憫にも被害者は打ちしおれて声も出ない。彼と親しくしていた先輩達が先頭に立って、各部屋を虱潰しに家捜しを実行した、が、一夜の禁足も無駄に終わった。

みんなは口には出さないが、それがかなり計画的なものだった事は容易に想像できた、しかし同じ釜の飯を喰って来た仲間から犯人は出したくないと云うのが本音だったろう。----- そうこうするうち新学期だ、大勢の人間が入れ替わる、どさくさの間うやむやにしまえ、----- 『解』の無いのが『正解』という問題もあったではないか ----- と

『夕べしじまに暮れゆけば 鳴くや千鳥の影さむく
荒磯に崩る波に聞け とわの真理とその声を 往きて帰らぬ囁きを』 (三番)

寮祭も三度目の経験となった頃、私は寮長として、むしろの様になった畳を敷きかえてもらおうと学校当局と掛け合っていた。そんなある日、寮費の収支を数年間さかのぼって調べる機会があった。その頃はもう豪傑達も居らず、滞納する者も少なくなっていたが、その後、先輩達からのまとまった送金もあり、長期未納の穴がおよそ埋められていたことを知った。

老朽化した建家は再開発の波に吞まれて、四寮は今や跡形もなく消え去った。中華街の一郭に、寮の卒業生達が時折集まっては旧交を温めていると聞く、その席上の話であるが我が四寮の寮歌が何と札幌の北大学生寮で、今も唱い継がれていると云う。

『紫けむる曙の 露もしとどの下草を
踏みてしだきて彷徨えば 心の雄琴澄みてなる 夢よ暫しはまどかなれ
----- 』 (四番)

聊斎志異；18世紀に刊行された清の怪異物語集

(建業34年卒 若松義幸)